パットとは「頭」か　　椿台春秋

入らない、入らない、１メートルのパットが入らない。こんな時にスコアメイクで大切なのはパットであることをあらためて実感する。２００ヤードのドライバーショットも３０センチのパットも同じ１打なのである▼パターが上手いと自負する友人は「パットは頭だよ」と自慢げに話す。こう言われると何とも否定できないのが悔しい▼パターは練習すれば上手になるのだろうが、多くのゴルファーはスタート前に練習グリーンで５分、１０分練習するくらいではないだろうか。パットの重要性を認識していても、練習はどうしてもドライバーが中心になるのがアベレージゴルファーの性である▼毎日毎日練習しているプロでさえパットが苦手なゴルファーも少なからずいるほどである。素人が悩むのも当然のことではないだろうか。ある精神科医のグループは「ショートパット苦手症候群」と名付けたほどである。その原因を失敗に対する恐怖と、勝利に対する強い希望が手首、腕、全身、そして脳みそまで金縛りにして、スムーズな動きが封じられるためだと考えられているとしている（夏坂健著「ゴルフの達人」日経ビジネス文庫）▼いろいろな原因が挙げられるだろうが、まずは医学的な解釈よりもどうすれば手っ取り早く入るかである。素人のすることと言えば、まずパターを取り換える。握りを変えてみるなどを試すくらいである。実際にある友人は名器と呼ばれる高価なパターはもう入らないと、最近取り換えたばかりである。上手くいかなければ道具のせいにしてしまうのが簡単である。これは何もパターに限ったことではない、ドライバーもアイアンも頻繁に取り換えるゴルファーは多い▼私たちにできることはリラックスして、ゆっくり動作することが肝要ではないだろうか。頭を動いたと指摘されても、ボールの行方はやはり気になる。パットがショートした際に「三浦とどかず」と叫んだ知り合いがいたが、この三浦とどかずさんはゴルフ場のあちこちにいる。